

☆「見方、感性のこりほぐす」(大野祐介)

皆さんこんにちは。都立富士高校茶道部の大野祐介と申します。
春一番はとうに吹き抜け、新たな生命の萌芽が視界を和ませ舞い散る花粉が目を襲う今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は(目と鼻を除いて)元気です。
そんな春の陽気に誘われて、ぶらりぶらりと東京都美術館を回って集めた見聞録を皆様にご紹介しましょう。

このときどんな企画展が行われていたか、情報通の皆さんならもちろんご存じかと思えます。そう「TURN フェス 2」です。正直に申し上げますと、私は恥ずかしながらこうした催しを全く知りませんでした。どんな目的でどんなものを展示しているのか一切知らないままただ漠然とした興味に誘われまだ見ぬ世界へ足を踏み入れていたのです。

しばらく回ってみておぼろげに分かってきたこの展示のテーマは、ありきたりな表現ですが「普段とは異なる視点から物事を見してみる」ということです。多くのアーティストと全国各地の福祉施設が協力して作り上げた作品たちが並ぶ会場の光景は、私たちが一般的に想像する展覧会の光景とは印象が大きくことなるものでした。自由な発想でのびのびと表現された作品を味わうには私の視点は凝り固まりすぎていたように思います。しかし一回りしてみるうちに段々と、しかし確実に私の感性はほどけていったのです。

この感性をほどくという行為を、何気なく日常生活を送る中で果たしてできるでしょうか。私たちは様々な文化や人々と共に暮らしています。そうした環境において私たちは自分の感性を信じすぎてしまうことがあります。その結果、未知のものに出会ったとき好奇心よりもむしろ恐怖を感じ、知らないうちに触れることを拒んでしまうことが多々ありませんか？目に映るもの全てが新鮮だった子ども時代を思い出してみてください。歳を取るほどに新しいものを見つける喜びは薄れ、やがて彩りのない生活に退屈する毎日を浪費するだけの人生は楽しいでしょうか。

そうならないための試みがこの TURN フェス 2 で行われていたのです。その一例をご紹介します。球体の家の間取りを考えるというワークショップでは、家という多くの人にとってあって当たり前のものへの概念を完全に覆されました。決まった床や天井、壁というものが存在せず転がることによってその役割が刻々と変わる構造の家・・・そんな家を想像できますか？あまりに現実的でないと考える人もいらっしゃることでしょう。そうして従来考えられないものを、そのまま考えないでいることこそ感性が凝り固まっているということなのです。ここで一度だけでも、ファンタジーの世界を考えてみるつもりで自分の思考に持ち込もうとすることで狭く硬化しかけた感性を解放することになるのです。もちろん、こんなことをしなくても社会で生きて行くことは十分に可能です。

ただ豊かな感性を保ってさえいればどんなに歳を取ってもただひたすら時間が経つのを眺めているだけではなく、毎日を主体的に楽しんで暮らせるのではないかと私は考えたのです。

【それぞれが考えた「球体の家」の間取り図】



このイベントの本来の目的は福祉施設との交流をアートによって促すことであろうと私は考えたのですが、同時に一人一人の持っている感性や価値観を見つめ直すきっかけ作りとしても機能していると感じました。人は知らないうちに自分の見ている世界を自分の見たい世界に作り替えて認識してしまいがちです。新し

いもの、知らないものに手を触れる行為は生物の本能からみてもそう簡単ではないでしょう。しかしそうした状況で勇気を出しうる能力を持ち合わせていたからこそ、ヒトによる文明はここまで栄えてきたのではないのでしょうか。もちろん本来のテーマの一端を担っているであろう障がい者とそうでない人々の交流を深めることも喫緊の課題です。共生社会を充実させる法律や制度は着々と整えられてきました。しかしそれらは社会のための入れ物に過ぎません。肝心なのは、その中に満たされるべき私たちがその資質を備えているかです。そのために私は何度も申し上げている「感覚をほどく」という行為が必要だと思うのです。それは私たちの暮らしをより豊かにするだけではありません。様々な立場や環境、経歴を持つ人々が互いに尊重し合って暮らす共生社会においても重要な役割を果たします。他人を思いやる、言葉にすれば簡単なことですが、自分とは全く違う存在である以上自分の感性や価値観でその人を推し量ることはとても難しいでしょう。ですが、普段とは異なる感性の世界に一度でも身を置いてみればその難易度は大きく下がります。そして例えば感性が凝り固まっても、何度でもほぐすことは可能です。そうした意味からこの TURN フェスは未来に向かって生きる全ての人々のためのイベントであると私は考えました。

最後に私がこのイベントで見つけた感性をほどくための7ヶ条をご紹介しますお別れしたいと思います。

- ・機会を逃さないこと
 - ・織り込まれた面白さを引き出すこと
 - ・リサーチ力をつけること
 - ・楽しもうとする意思を持つこと
 - ・しかし自然体でいること
 - ・いつでも思い出してみること。
 - ・！を大切にすること
- それではまたどこかでお会い致しましょう。